

杲宝教学における安然義引用の特色

千 葉 正

一 はじめに

十四世紀、日本において古義派真言宗の中で「東寺の三宝」(頼宝、杲宝、賢宝)と称される人々によって、約百年余の間だけ、一種の教学復興運動が展開され、この運動によって東寺学派が形成されたのである。なかでも、東寺、観智院を開いた杲宝(一二三〇六一—一三六二)は、数多くの著述を残したことから、この東寺学派の中心的人物として、杲宝教学とも云える程の教学大系を打ち立てた学僧なのである。本稿では、筆者の研究対象とする、この杲宝教学解明の一端として、杲宝の台密観がどのような傾向であったのかを、天台密教の大成者たる五大院安然(八四一?—没年不詳へ九一五?)の説の引用の特色を通して考察していきたいと思う。

まず、何故、安然を選んだのかと言えば、本稿で取り上げる資料の中で、台密関係のもので、一番、多く引用されるの

は安然で、次に円珍、そして、宝地房証真なのである。であるから、天台密教(台密)を代表して、台密の大成者としての安然を取り上げたのである。

次に、問題の所在を述べてみたい。古義派真言宗の学僧である杲宝からすれば、台密は批判の対象となるであろう。さらに、台密の大成者としての安然の説は、正に、批判されるべきものと言える。では、具体的に安然のどのような説が批判対象となっているのであろうか。また、杲宝にとっての台密批判とは、どのような意味を持っていたのか。つまり、杲宝は、何かの意図を持って、安然の説を引用したのだとすれば、それは、教育的な批判なのか、或は、単純で、感情的な台密批判なのか、一体、どちらに主眼を置いたのが問題となる。そこで、以上のような疑問点を、問題の所在として、本稿を進めていきたいと思う。

次に、本稿では、数多く有る杲宝の著述の中から、安然の

説を多く引用している著述と『杲宝私抄』全十二巻と『アキ
シャ鈔』全二十四巻の以上、二つの作品を取り上げて検討し
ていきたいと思う。この二つの著述の中での、安然の説の引
用について、一体、安然の撰述書のどの書からの引用が中心
となっているのかと言え、『真言宗教時問答』全四巻（以降
『教時義』と略す）と、『胎蔵金剛菩提心義略問答抄』全五巻
（以降、『菩提心義抄』と略）という二つの書からなのである。

何れも、安然の密教教相部を代表する書といえる。そこで、
杲宝の安然義引用の特色を、これらの安然の書の内容から予
測すれば、やはり、批判的に用いるものと言えらるであろう。

それでは、以上のことに留意しつつ、本稿では、まず、杲
宝について、その教学大系の中の代表的な考えを取り上げ概
観する。続いて、杲宝をめぐる、これ迄に為された先学の研
究を紹介し、次に、安然義引用の箇所 of 具体的な検討、考察
に入り、そして、最後にまとめ、今後の課題を述べると
いう順序で、本稿を進めていきたいと思う。

二 杲宝について

ここでは、杲宝教学の代表的な考えの一つを取り上げ、そ
れを概観して、次に、杲宝をめぐる、これ迄に為された先
学の研究史の一端を紹介し、続いて『杲宝私抄』と『アキシ
ヤ鈔』の構成の概要を述べていくことにする。

まず、杲宝教学の特徴の概観である。最初に、東寺学派と
杲宝教学とに共通する教学⁽³⁾の特徴について触れてみたい。前
にも述べたように、杲宝は、十四世紀に東寺で興った教学
復興に大いに尽した人物である。特に、師である頼宝（一二
七九—一三三〇）、そして、弟子である賢宝（一三三三—一三九
八）とを合わせて「東寺の三宝」と称される。この「東寺の
三宝」の活躍した、十四世紀だけの、僅か百年余りの間だ
け、東寺学派という教学復興の流れが形成されたのである。

では、この東寺学派の代表的な教学の特徴について述べて
みる。それは、〈教主論〉になると思われる。この「教主論」
というのは、密教で立てられた「仏身論」のうち「法身説」
に基づいて『大日経』における、法身大日如来（自性法身）自
内証の法門を説き続ける主尊の身格をめぐる、「本地身説」
と「加持身説」とが『大日経疏』⁽⁴⁾の中で立てられたというこ
とに因って成立した議論なのである。まず「本地身説」と
は、自性法身は自証の極位にあり、唯仏与仏の境界に居なが
ら、そのまま衆生に法を説いているのである、という説で
ある。次に「加持身説」とは、自証の極位の自性法身の他
に、加持の世界、仏と人との関わりの世界を認める、という
説なのである。つまり、自性法身という極位にありながら説
法という働きが有るのか、無いのかの論議なのである。その
「教主論」をめぐる、日本の密教家たちは、古来（特に鎌

倉時代に入ってから）より論争を続けていたのである。所謂、高野山や東寺を中心する古義派真言では「本地身説」を取り、覚鑿上人（一〇九五—一四三）の革新運動に端を発する、根来寺を中心とする新義派真言宗、特に、頼瑜（一二二六—一三〇四）や、聖憲（一二三〇—一三九二）たちは「加持身説」を取ったのである。これらの「教主論」をめぐる問題について、その諸説をまとめた書として、『教主義合纂』（林田光禅編、大正十年、国訳密教刊行会）という有益な書がある。その中で、この「教主論」について、江戸時代後期までに三十一家の学説が取り上げられている。

それでは、杲宝は、東寺で活躍していたので、「本地身説」の立場を取っているのである。それは、『大日経教主本地加持分別事』という書で、「私に云わく。此の経一部六卷処に、教主を呼んで、毘盧遮那と云う。毘盧遮那とは是れ本地法身の異名なり。」と説かれていることから分るのである。しかし、同書では、次のようにも説かれている。

尋云。且於第一根本地加持二仏、為別將為同。若云別。似有九祖。違大師処。釈八祖相伝。若云同者。本地法爾常住。加持隨緣出沒二仏体別也。何云同耶。
答。推大師御意。同而非別歟。本地加持一仏上約義分二。約法体為本地。約機感為加持。譬如日光遍法界。雖常存於清濁器。有隱顯。上仏身亦如是。

杲宝教学における安然義引用の特色（千葉）

ここでは、弘法大師空海の本意としては、本地身も加持身も同じ、法身大日如来（自性法身）を本体としているのであるとして、「本地身説」と「加持身説」との融会を図っているのである。つまり、杲宝の立場は、単純な「本地身説」ではないと言えよう。

さて、以上が、杲宝の代表的教学の特徴としての「教主論」を取り上げてみたが、結果的に「本地身説」を取っていたといっても、そこには、複雑な見解も混じっていたことが見て取れたと思う。続いて、この「教主論」の問題を承けて、筆者がこれ迄に、杲宝の禅宗観について論じた論文の内容を、簡単にまとめてみたい。その内容は、杲宝の禅宗観と、その禅宗批判の教学的背景という二つにまとめられる。まず、「杲宝の禅宗観」についてである。ここでは、杲宝の著述の『開心抄』全三卷（大正蔵七七卷所収）の中、禅宗を論じている上巻を取り上げて検討した結果、次の二点に絞られたのである。第一点目は、禅宗をあくまでも顕教に判じて、禅密一致説を批判しているということである。第二点目は、禅宗の立てる西天二十八祖説の不当性を論ずるということである。続いて、「禅宗批判の教学的背景」についてである。これは、前に述べた「教主論」が、禅宗批判の教学的背景と成り得るか、どうかを検討してみたのである。結論として、ここでは、杲宝をはじめとする東寺学派の代表的教学である

「教主論」の「本地身説」が、禪宗批判の教学的背景として成り得ることが判明したのである。以上が、杲宝教学の代表的教学としての「教主論」の概観である。

次に、杲宝について、これまでになされてきた先学の研究を紹介してみたい。まず、杲宝個人について、まとまった研究は全く為されていないという状況なのである。しかし、杲宝をはじめとして、頼宝、賢宝という「東寺の三宝」につ

ての研究は、二つだけまとまったものが存在する。まず、古い順で、無名の人物であるが、大北善照氏の「南山学派と東

寺学派（一）—（五）」⁽¹⁾『密教研究』第二〇—第二十四号、大正十五年—昭和二年」という論文である。これは大正時代末から昭和時代初期にかけてまとめられた、かなり古い論文である。この論文は、中世真言密教の高野山（南山学派）と東寺（東寺学派）における、それぞれの教団と教義の違いを比較しつつ、

詳細にまとめた内容となっている。特に、この論文は、本稿を書くに際して、大変に参考になった論文というだけではなく、杲宝教学を考え上でも、大きな示唆を与えてくれた論文なのでもある。次は、櫛田良洪氏の『統真言密教成立過程の研究』（昭和五十四年、山喜房）所収の「中世東寺教学の展開」という論文である。⁽⁸⁾これは、中世東寺教学の展開と東寺教団の成立、及び、近世新義教団の発展過程が論じられている。教団史を中心にした論文、著書である。以上の二つが、中世

東寺学派をめぐっての、先学が残された研究成果ということになる。しかし、この二つだけしか、中世真言密教、特に東寺を中心とする研究論文がないという状況は、一体、どういう事なのであろうか。この状況は、どうしても、真言密教側では、空海や覚鑿についての研究が主流を占めてしまっているということと、密教では教相より事相を重視してしまうということがあるからなのではないだろうか。

三 『杲宝私抄』と『アキシャ鈔』について

次に、本稿で取り上げる『杲宝私抄』と『アキシャ鈔』の内容構成に関して、その概略を述べてみたい。（なお、本稿で取り扱う『杲宝私抄』は『真言宗全書』第二〇巻所収のもの、『アキシャ鈔』は『真言宗全書』第二十一巻所収のものをを用いる）まず、『杲宝私抄』である。本書は、暦応三年（一三三〇年）に東寺西院で撰述されたのである。内容は『大日経疏』や、十卷章等における教相上主要題、それは結集者、四曼同体別体、釈迦大日二仏同異、五方五智、即身成仏因行等の以上、七十六条選び出して、それぞれの条毎に経論章疏、祖師先徳の釈文を引証して、問答体に義趣を詳細に述べた古義派の宗義決撰書の一つなのである。次に、『アキシャ鈔』全二十四巻について述べてみたい。まず、この書の表題の「アキシャ」とは、悉曇字母表ではア(ā)は最初、キシヤ(kṣa)は最後の

字母であり、「全体、無尽」を意味するのである。本書は、
卓和二年（一三四六年）六月から翌年の五月にかけて、東寺の
西院僧坊と僧長院において、杲宝の口述したものを弟子の観
宝が筆録して完成させた書である。内容は、前半の十巻に密
教の血脈相承説を詳しく論じ、後半の次の十巻に真言宗所依
の経論章疏を論述し、残りの巻二十一以降は教主論を中心
に論じているのである。以上の両書とも、杲宝の学風と教学を
理解する上では、大変に、優れた書として知られている。で
は『杲宝私抄』と『アキシャ鈔』の内容、構成についての概
略を述べるころえて。次に、杲宝の安然義引用の特色につ
いての具体的な、検討に移りたいと思う。

四 引用箇所の内容の検討と考察

まず、内容の検討と考察に入る前に、この『杲宝私抄』
と『アキシャ鈔』の二つの書には、かなりの数に上る、安然
の説の引用が為されている。それ故、本稿では、それらの総
て一つ一つについて検討することは出来ない、その引用
箇所が、杲宝の書の中の、どのような主題の下に引用されて
いるのかを考えた上で、次の三つの主題に分類してみたいと
思う。つまり、この三つの主題をもって、杲宝教学における
安然義引用の特色をまとめてみたりと考えたからなのであ
る。まず、第一には、「顕教と密教との区別の問題」。第二に

は「教主論の問題」。第三には、「相承の問題」と以上の三つ
の主題の下に検討、考察を行なっていこうと思う。

1、顕教と密教との区別の問題

この主題を付けた理由は、安然を含めた台密全体が、顕教
として見られるのか、密教として見られるのかという問題が
論じられている箇所を検討して、果して、台密が杲宝からす
れば、何れに判じられているのかを考察してみたいと思っ
たからなのである。つまり、空海の『弁顕密二教論』などに基
づく、真言密教内の教判論ということになると言える。ここ
では、『杲宝私抄』を用いて検討してみたい。（なお、『杲宝私
抄』と『アキシャ鈔』とは『真言宗全書』所収のものを使うが、以
後は『真言宗全書』を『真全』と略すことにする）

まず、真実の一乗の教えを説くことが出来るのは密教なの
か、顕教であるのかを問うものとして、「一乗実義唯在密教一
歟事」という章が、『杲宝私抄』巻第四に立てられている。
そして、この章では、

菩提心義第二云。今真言宗大日経義積。積大那羅延力執金剛、
云。如一闍提必死之疾。二乗實際作証已死之人。諸仏医王明
見如来性故。則能必定師子吼於治療因縁不佞弱云云（『真
全』二〇、六〇下）

と、安然の『菩提心義抄』巻第二（大正蔵七五、四八二下—四
八三中）から長文が引用され、続いて、「此等所説皆是法身

地中大日智印。大那羅延力執金剛三昧耶。現シテ積迦形。入ニ宝
処三昧中所レ説。」（『真全』二〇、六一上）という箇所を引用
している。そして、この安然の説の引用の最後には、

勝鬘經中、収ニ一乘。法花涅槃會三一乘。皆入ニ不動明王三昧耶。
所レ説云云又花嚴法界。般若十二無為。一色一香非無中道。法花
実相。涅槃仏性。入ニ一字仏頂三昧耶門二所レ説云云（『真全』二
〇、六一下）

と引用している。この引用箇所では、安然は密教で説くところ
の一乗は、あらゆる顯教で説かれる一乗を、全て撰め含め
るものであると説いている。そして、この安然の説に対し
て、杲宝の見解は、まず、密教の一乗については、

私云。一乘実義。密教不ニ共義。有ニ多因由。一名体不同。諸
教中所レ説一乘者。有ニ名字無ニ実体。密教所説一乘者。名体具
足。謂一乘者ニ仏乘也。仏ニ乘者ニ三密教也。乘ニ此三密門二到ニ仏
果故名仏乘。三摩地儀軌云。演説如来三密門。金剛一乘ニ甚
深。文十方諸仏必乘ニ此真言門二到ニ仏地ニ仏道同。更無ニ異路。
（『真全』二〇、六一上）

と密教で説く一乗を、金剛智訳の『金剛頂經瑜伽修習毘盧遮
那三摩地法』（略して『三摩地儀軌』）から引用して定義づけ、
そして、安然の前出の説に対しては、次のように論ずる。

法花ニ等中所レ明乘義。猶是三乘乘。非ニ一乘乘。深可レ思之。
上来三義。初約ニ惣相。次約ニ義。後約ニ乘義。凡此一篇安然
所レ積。誠有ニ其謂。諸經中所レ説一乘皆是ニ大日如来一分義用也。

（『真全』二〇、六三下）

これは、この一乗の実義の問題は、まず、『法華經』などの
經典で説かれる一乗の教えは、三乗の段階にあると判じて、
安然の説を、杲宝は、大日如来自内証の法門の中での、一部
分の説だけを明かしたに過ぎないと難じている。つまり、安
然は天台法華宗の立場にあって、顯教の經典である『法華
經』に基づいた説を取っているのであると、杲宝は捉えてい
たとしよう。

次に、『華嚴經』をめぐる、安然の説に対す検討に移りた
いと思う。ここでは、『杲宝私抄』巻第五から、「以ニ華嚴極
仏ニ為ニ無明辺域二事一」という章を見てみたい。まず、『教時
義』巻第一（大正蔵七五、三九一下）からの引用の中で、

又梵網經。出ニ金剛頂淺略元文二云云彼菩薩大蔵經是華嚴經広本。
大日義積多引レ証。然機有ニ淺深。教有ニ顯密。故於ニ一經二顯
機聞レ為ニ華嚴經。密教聞レ為ニ胎藏教。（『真全』二〇、七三下）

という箇所がある。これは、安然自身の台密が、あくまでも
密教であることの表明といっても良いであろう。そして『華
嚴經』を機根の優れた者からすれば、密教の教えを説く經典
なのである、とも述べているのである。さらに、先の問い
を、改めて問い直す為に、

問。高野空和上ニ宝鑰ニ積ニ極ニ無ニ自性心二云云龍猛菩薩説ニ三自一心
法二無明辺域一。非ニ明分位一。何故得レ言レ与ニ真言宗胎藏仏一同上。

答。此海和上判華嚴、為無明、則有三失。一、違金剛頂失二、違大日經失。三、違守護經失。『真全』二〇、七四上。

と引用している。これは、空海の十住心の教判に対する、安然の批判の箇所なのである。特に、ここで、取り上げた引用箇所は、空海が華嚴宗を第九住心に配した上で、『金剛頂經』と『大日經』と『釈摩訶衍論』とを引用して、結極は、『華嚴經』の毘盧舍那仏は、まだ、無明の辺域に位置する、と説く『秘藏宝鑰』の説に対して、安然は「三つの失」が有ると述べる箇所なのである。その箇所、安然は、『金剛頂經』と『大日經』と『守護国界主陀羅尼經』とに真言教主の説があり、その真言教主と、華嚴の極仏とは同一の体である説いている。この安然の説の背景には、安然が『教時義』の中で立てた、「四一十門の教判」の存在を指摘できるのであろう。そこで、以上の安然の説に対する、杲宝の見解は、

次、高野和尚宝鑰、出三、失、如、文也。上来疑難会通、方如何。答。先蓮華胎藏三界同处者。其本説如何。唯以名字相似、何判、難思境界、耶。彼蓮華藏世界者。十身盧舍那住处。是修行種因海未証之仏也。此胎藏世界者。自性法身所住不二果海之極仏也。『真全』二〇

と述べている。ここでは、『華嚴經』や『梵網經』で説かれる究極の仏果は、まだ、密教の自性法身の極仏の境界から見

杲宝教学における安然義引用の特色(千葉)

れば「未証仏」にしか過ぎないのだと、杲宝は論じているのである。さらに、続けて、杲宝は、

次、菩薩大藏經華嚴広本者。此又太非也。彼義決意。菩薩大藏經者。金剛頂經塔内広本也。何以云華嚴經広本乎。梵網經金剛頂淺略者。是還答者潤色也。金剛頂經深秘。華嚴經淺略。淺深大別。故全不可云一仏。『真全』二〇、七五上

と述べている。ここでは、『金剛頂經』と『華嚴經』とを比較して、安然が『金剛頂經』を『梵網經』よりも浅略であると判じたことへの批判となっている。逆に杲宝は、「金剛頂經深秘。華嚴經淺略。」と言いつ返しているのである。ここでも、顯教としての『華嚴經』と、密教としての『金剛頂經』との区別を付けているのであると言えよう。

次に、この「顯教と密教との区別の問題」を考察する、最後として、『杲宝私抄』巻第五に立てられている、「顯密二教理体同異事」という章(『真全』二〇、八四上―八五下)について、その内容を簡単に述べてみたい。ここでは、まず、安然の『教時義』巻第二(大正蔵七五、四〇三下)から文が引用される。そして、この章は、顯教と密教とが到り着く究極の悟り(理)が同じなのか、違うのかを尋ねるのである。また、「理」は有色なのか、無色なのか、或は、無言なのか、有言なのか、という問題も含まれている。そして、結論としては、杲宝は、「而実、顯理、遮情、方便入仏法初門也。密理、密藏中、

無尺莊嚴理也。」(『真全』二〇、八五上)と述べて、はっきりと顯教の究極なる理と、密教の究極なる理とは違うのであると判ずるのである。

さて、以上のことから、「顯教と密教との区別の問題」における安然義引用の特色についてまとめらば、ここでは、杲宝は安然の説を引用することで、台密はまだ、顯教に位置づけられる法門であると、批判的に判定する為の引用であるということが言えよう。

2、教主論の問題

次に、「教主論の問題」をめぐる、安然義引用の特色についての検討、考察に移りたいと思う。ここでは、本稿の、「二、杲宝について」の章でも触れたように、日本の真言密教における重要な教学論争の一つである「教主論」についての安然の説に対する、杲宝の見解を取り上げて、それを検討してみる。

まず、「教主論」の根幹を成す本地身説と、加持身の典拠は、『大日経疏』卷第一に由来しているということ(4)は、既に見てきている。

それでは、具体的な検討に入っている。ここでは、『杲宝私抄』卷第九から「法花大日両経本地身同異事」という章と、『同抄』卷第十一から「大日経能説教主本地加持分別事」という章を取り上げ、そして、『アキシヤ鈔』卷第二十一末より「大

日経教主事」という章の、以上の三章における安然義引用の特色を考えていきたいと思う。まず、「法花大日両経本地身同異事」という章である。この章の冒頭では、

教時義第二云。大日義積は無畏説一行記。説云此経本地身即是妙法蓮花最深秘処。云云(『真全』二〇、一三二上)

と、安然の『教時義』卷第二(大正蔵七五、四〇三下)からの引用で始まる。この引用箇所は、安然が、空海の十住心の教判に対して、「五つの失」があるとして批判した中から、「第五の衆師の説に違ふ失」という箇所の冒頭の文である。ここでは、『大日経』の教主である本地法身(自性法身)と『法華経』の教主とが、同一なのであるということが述べられている。これは、「大日釈迦一体説」という台密で考え出された説が背景にあると思われる。そして、この安然の説に対して、杲宝は、

疏第六。此経本地常身等文安和上判。為広説略説異。然者於本地体者全不可有其别(『真全』二〇、一三五上)

と、直接に安然の名を出して、『大日経』の教主には広説か、略説かの違いは無いということ(4)を述べる。また、続けて、次のように詳しく論ずる。

而安和上以疏第六文、為略説広説。太以不可也。已对最深秘処云三方便略説。以知浅略深秘不同明之。凡疏家教相以法花花嚴、撰第三劫。寿量本地説皆此中。是淨菩提心初法門。

地前遮情極仏也。此上更立表徳十地。第十一地毘廬遮那名本地法身。其位大別也。不可混同者歟。〔真全〕二〇、一三五下)

ここでは、再び安然(安和上)を名指しで引用する。まず、この中の「疏家」とは、『大日経疏』の作者であり、『大日経』の翻訳者でもある善無畏(六三七―七三五)のことである。そして、空海のことを「宗家」と称している。また「地前遮情極仏」とは、凡夫が迷情を順々に、悟りを目指して遮絶していくという、段階的な修行を積んで仏果を得ることを、密教で消極的、否定的なこととしてそのように表現して呼んだのである。つまり、三劫成仏を取る顕教のこと指しているのである。そして、「表徳十地」とは、表徳とは成仏への接近を積極的に表わすことである。それは、果位に立って、十地のすべてを密教至極の境地とみて、また、十地のすべてを無高下無浅深ともみるあり方なのである。つまり、即身成仏を取る密教のことを指しているのである。ここでは、仏果である「第十一地」にいる大日如来を本地法身として捉えている。そして、『法華経』に基づく久遠実成の本門の仏を本地身とする説を取る、台密の代表として、安然の名を出して、安然の解釈は「地前遮情極仏」の立場に停まる考えなのであると、杲宝は判じて、批判しているのである。

さて、この「法花大日経本地身同異事」という章にお

る、杲宝の最後の見解は、

今宗不爾。迷悟不二真妄即一故。若本覺若始覺。絶相對一故。本地実義能成立者也。〔真全〕二〇、一三六下)

と述べている。これは、あらゆる相対的なあり方を、すべて、超え切った所に、絶対的な本地身の在り方が成り立つと、杲宝は説いているのである。つまり、杲宝は「本地身説」の立場を取るから、以上のような考えなのであると言えよう。

次に、『杲宝私抄』巻第十一の「大日経能説教主本地加持分別事」という章を検討してみたい。この章では、直接には安然の説を引用していないのだが、「教主論」について、基本的な問題が論じられているので、少し、眺めてみたいと思う。まず、

尋云。疏第一教主名本地法身。住处。釈次云如来是仏加持身。下其所住处名仏受用身。意如何。〔真全〕二〇、一五六上―下)

と尋ねている。この問いは、「教主論」をめぐる基本的な問いであると言える。そして、杲宝は、次のような見解を述べる。

是又雖云加持全非随縁加持。不動本地功德。加被所住土。故。与本地身無二無別也。疏釈云。既從遍一切処加持力。生。則与無相法身無二無別。文可思之。〔真全〕二〇、

一五七上

これは、まず『大日経疏』巻第一（大正蔵三九、五八〇上）⁽⁹⁾からの説を引用して、本地身も加持身も、自性法身上では相い対立するものではないといいながらも、「不動本地功德」と言いつて、杲宝は「本地身説」の立場を取るということを主張しているのである。この章では、安然の説は引用されていないが、安然の名だけが取り上げられている。それは、次のような問いの中で出されている。

問。見_ニ經文次第_一。薄伽梵句雖_レ拳_ニ本地身_一。如来加持_レ句示_ニ加持受用身_一。故本地身更住_ニ加持身_一。説法見他門_ニ覺苑安然_一。并東寺學者。多成_ニ此意_一。就_レ中般若寺鈔云。加持身者曼茶羅中台尊。

此名_ニ加持身_一常_ニ報身_一也。安然者如何_又出_其体_云。此宮善提處。魔驅首古仏成天宮文。

『真全』二〇、一五七上

ここでは、安然が、覺苑（十一世紀、遼国の僧。『大日経義釈演密鈔』を著す）と共に、名が挙げられている。また、「般若寺鈔」とは、般若寺僧上、寛賢（八五三—九二五。理源大師聖宝の弟子）の著した、『大日経疏鈔』（日仏全四二、二上）からの引用である。さらに「東寺学者」とあるが、これは、杲宝は小野流の系統であるから、広沢流の系統で東寺に住した（東寺長者などに就いた人か）僧侶のことだと思われる。つまり、安然は、真言密教の東寺系の一部の学僧と同じ説を取っていると判じられている。それでは、この問いの主題となる箇所

は、「故本地身更住_ニ加持身_一説法見」ということになる。これは、本地身が、変わって加持身に成ると言っているのである。

しかし、杲宝は、この問いに対する答えでは、

答。教主住_ニ其体各別_一也。以_ニ住_ニ其_一為_ニ教主_一。之義太違_ニ諸經例_一。誰可_レ信_ニ用_一之耶。疏拳_ニ住_ニ其_一名字_ニ云_一。釈_ニ歎_ニ加持住_ニ其_一故云_ニ広大金剛法界宮_一。文明_ニ知_ニ法界宮_一者指_ニ智_ニ其_一城_一。何可_レ云_ニ仏身_一乎。

『真全』二〇、一五七上

と論じている。ここでは、教主が、その説法をする場所毎に、その教主の名称、在り方が変わってしまうことを批判するのである。つまり、本地身はどこに住しても、その本質、本性は変わらないのであるということが言えよう。そして、その批判の表現も、「ただ諸経の例に違す」と厳しい言い方なのである。この批判は、同じ、真言密教に属する者と、安然に対して向けられている。それは、前にも見たが、「不動本地功德」や「本地身無_ニ無別_一」と説く、杲宝の立場に基づく批判だと言える。

次に、「教主論の問題」を検討することの、最後として、今度は、『アキシヤ鈔』巻第二十一末より「大日経教主事」という章を取り上げてみたい。この『アキシヤ鈔』巻第二十一は、本、末の二巻から成っているが、両巻に互って「大日経教主事」という大きな章が立てられている。まず「本巻」で

は、「加持身義」が論じられ、「末卷」では、「本地身義」が論じられている。そして、本稿では、「末卷」の「本地身義」を中心に検討してみたいと思う。その中でも、特に「以本地身為教主一文」という箇所を取り上げてみる。

まず、ここでは、『大日経疏』卷第一からの引用がなされてから始まる。そして、この箇所では、安然の『教時義』卷第二（大正蔵七五、四〇九下）からの説を次のように引用する。

彈云。就此積諸師致料簡其意不一准。且依安然積此文。又以加持身為教主。教時義第二云。此有二種。一以仏身為仏住処。二以仏土為仏住処云云（『真全』二一、一九二下）

ここでは、冒頭に「彈云」とあって、批判をする為の安然の説の引用となる。つまり、「依安然積」。此文又以加持身為教主」と、初めに述べているように、ここでも、安然は、明らかに「加持身説」の立場を取るものであると断定している。そして、続けて、杲宝は、『教時義』卷第一から（大正蔵七五、三八二下）次の様に、引用している。

教時義第一云。真言大日住他受用。以此為門開頭内証。頭教釈迦住變化身。以此為門開頭内証。文即是意也。若本地法身直説此經者。所立義誠有謂。而本地身住加持身説之。歸本雖云本地法身。論其当位正是加持身也。（『真全』二

杲宝教学における安然義引用の特色（千葉）

三、一九三下

ここでは、安然の説を引用している中で、安然の説には、大日如来を「他受用身」と説いている。しかし、この説は、真言密教側で立てる「四身説」の仏身観では、大日如来は「自性法身」なのであるから、既に、安然の説は受け入れられないのである。さらに、杲宝は「論其当位正是加持身也」と述べて、安然が「加持身説」を取っていることを、再確認させている。さらに、杲宝は、

以加持身為教主之義。無諍者歟如何。會云。於住処成就句二分三重。以仏身為住処之義。匪畜余經中無其例。將又大違疏家積。（『真全』二一、一九三下）

と述べて、ここでは、安然の説は、「疏家」である善無畏の『大日経疏』での解釈に反しているのだと批判を行っている。つまり、仏身と住処とを、本地身と加持身とにそれぞれ分けてしまっていることへの批判と言えよう。そして、この安然の説への批判の最後に、

驚是仏加持身積。不可云。以仏身為住処。倩案辭意。智証安然雖入密室未脱頭網。偏執法身無説義。徒作胸臆無窮積。有智人誰可依用之耶（『真全』二一、一九四上）

と結んでいる。これは「本地身説」の立場から言えば、住処と仏身とは別々にはならない、無二無別なのであるということに基づく批判と云えよう。さらに、安然の説への批判とし

ては「未だ頭網を脱せず」と言い切っていることは、大変に厳しく、決定的な見解なのである。

以上、「教主論の問題」について検討してきたが、結論としては、安然を「加持身説」を取る者と判じ、円珍や安然の説は、まだ頭教の段階に留まっていると判じているということになる。

3、相承の問題

次に、杲宝の安然義引用の特色についての、具体的検討の最後として、「相承(血脈)の問題」を取り上げてみたいと思う。まず、密教において、法の相承の問題は、非常に重視されるものなのである。それは、筆者が以前に検討した「杲宝の禅宗観⁽³⁾」において、杲宝は、禅宗の西天二十八祖説を批判したことで、その重要性を確認できたからなのである。

では、この章では『アキシヤ鈔』巻第一を用いて、そこに論じられている、「相承の問題」を検討していくこととする。最初に、東寺における相承の正当性を述べた箇所として、「両部大歟一大頭教説時前後事」という章が立てられている。まず、杲宝は、東寺の正統性を述べる箇所に入っている前に、空海の『御遺告』の一部を引用する⁽¹⁰⁾。その引用部分には、密教の法の相伝の有り様が記され、そこには、大日如来から数えて第八代目の空海までの名が列ねられている。正に、法の相伝を重視する、密教の特徴と云えよう。そして、

この引用の後に、

私云。両部秘藏嫡嫡相承次第。以此等文、為二本拠。自大日如来至不空三藏。此是六人以為付法正嫡。表制集文載、而炳焉也。不空三藏付法八人。惠果独伝、両部師位。惠果付法八人。大師独当瀉瓶之人。然則三國相承正統唯在東寺一流。爰唐朝海雲造玄付法記。日本伝教智証血脈図。其説聊雖不同。所傳皆攀枝末、所示多違本文。(『真全』二一、十七下—十八上)

と述べている。ここでは、東寺に於ける相伝の正統性が強く、主張されているが分る。それは、また、惠果の孫弟子の海雲の『付法記』や最澄、円珍の『血脈図』に基づく台密側の相承の誤謬性も指摘することによって、東寺の正統性というより、空海以来の真言密教側に、真実の密教の法の相承が為されたのだということを示しているのである。

さらに、天台宗が、その相承の次第を述べる際に依り所とする、『付法蔵経』(『付法蔵因縁伝』)をめぐって、杲宝は、「付法蔵経仏説歎事」という章を立てているので、それを、次に見てみたいと思う。まず、「尋ねて云く。付法蔵経は仏説か、如何ん」(『真全』二二、十八下)と尋ねる。つまり、『付法蔵経』は仏説なのかどうかを問うている。この答えの中で、

但止観第一拳、付法蔵経、二十四祖、諸師皆金口所記文、又安然、教時諍論中、拳二十四祖、已上仏記文、若拠此等説、仏説見披経文、

可^レ悉^ス之^ヲ矣(『真全』二二、十八下)

と述べている。ここでは、智顛の『摩訶止観』卷第一上(大正藏四六、一上—中にかけての取意)から引用し、続けて、安然の『教時諍論』(大正藏七五、三六三下—三六四上)からも引用し、両方とも『付法藏經』に依っていることを示した上で、智顛も安然も「仏記」と言っているもので、この經典は仏説なのであると、簡略に述べている。つまり、この「仏説」或は「仏記」という言葉が、何か問題となっっているように思われる。それは、ここでの「仏説」とは、応化身の釈迦の説かれた教えということを示しているのではないだろうか。そこで、具体的な検討は省くが、杲宝は「付法藏經二十四祖為大乘相承歟事」(『真全』二二、十八下)という章を、続けて、立てているのである。つまり、この章の題から推理しても、この「大乘相承」ということと、『付法藏經』の相承説は仏説であるということとを重ね合わせようとしているのではないかと考えられる。正に、「仏説」と「大乘相承」とを以って、台密の相承は、法身大日如来からの直直の相承ではない、応化身釈迦からの相承であるとして取っている。従って、杲宝は、台密は顕教に属する相承説なのであると、判じているものと言える。

五 おわりに

杲宝教学における安然義引用の特色(千葉)

さて、以上、杲宝教学における安然義引用の特色について、『杲宝私抄』と『アキシヤ鈔』という二つの資料を用いて、その内容を検討してきた。以下に、その検討の結果をまとめ、そして、今後の課題を述べてみたい。

まず、検討の結果、この安然義引用の特色についての、杲宝の見解の全体的な特徴は、極めて批判的であったということである。そして、その批判態度は、教育的か、感情的か、何れかと言えば、感感的な批判の方がやや多かったと思われる。

次に、本稿では、その引用の特色についての具体的な検討をする当って、「1、顕教と密教との区別の問題」、「2、教主論の問題」、「3、相承の問題」、以上の三つの主題を設定して考察してみたのだが、その結果を、次の三点にまとめてみたい。第一点目は、正に安然の説を代表させて、台密を顕教に位置づけるということである。このことは「教主論」にも関わるからなのである。つまり、『大日経』(法身・大日如来)と『法華経』(応化身・釈迦)との同一化を図ろうとする、台密への批判と言える。第二点目は、顕密の区別と教主論にも関わる安然の説として、空海の十住心の説への批判を行なった、『教時義』巻二の説に対する批判ということである。この杲宝の批判は、真言密教側からの重要な批判であると言える。第三点目は、相承の問題に関して、中国、日本も含め

た天台宗の立てる相承説は、頭教の相承であることを再確認させているということである。

しかし、以上のことは、杲宝教学解明の一端を論じたに過ぎないのである。であるから、その杲宝教学を含めた、「東寺の三宝」を中心とする東寺学派教学の全体像を解明する為にも、中世に至るまでの、空海以降の真言密教教学の歴史的展開を考察しなければならないということが今後の課題と言える。

註

(1) この東寺学派の名称は、一般的な呼称ではないと思われる。筆者は、大北善照という人の「南山学派と東寺学派」という大正末期から昭和初期にかけて、『密教研究』に連載された論文の中から取り出して、敢えて、この東寺学派という名称を用いることにした。何故かと言えば、真言密教の事相重視の傾向の中で、「東寺の三宝」と称される学僧たちに、「学派」と呼ばせるだけの教学体系が存在していたのではないかと考えたからである。(尚、大北氏の論文については、本稿の二、杲宝についてで紹介している)

(2) 台密と東密という呼称は、虎関師鍊の『元亨釈書』(一二三二二年成立)巻第二十七、志一、諸宗志三、密の章に、「延暦末。伝教弘法一時異受。故有_二台密。有_二東密_一」(新訂『国史大系』第三十一巻、四〇九頁、昭和五年版)と記されているのが初出とされる。

(3) 拙稿「古義派真言宗における禅宗批判―『開心抄』考―」(『駅沢大学大学院仏教学研究會年報』第二十六号、一九九三年五月、四四―五六頁)、同「杲宝の禅宗観―『開心抄』上巻をめぐって―」(『印仏研』四十二―二、平成六年三月、一一―一二〇頁)、同「杲宝の禅宗批判の教学的背景について」(『印仏研』四十三―二、平成七年三月、八八―九〇頁)、以上、三本の論文では、それぞれにおいて杲宝教学の一端を考察してみた。その内容としては、禅宗批判(禅宗を頭教と判ずる、西天二十八祖説批判)と教主論が中心となっている。

(4) 本地身説の典拠は、『大日経疏』巻第一に、「薄伽梵即毘盧遮那本地法身」(大正蔵三九、五八〇上)と説かれていることに依る。加持身説は、『同疏』に、「爾時世尊、往昔大悲願故、而作_二是念_一。若我俱住_二如是境界_一、則諸有情不_レ能_二以_レ是蒙_レ益_一。是故住_二於自在神力_一加持三昧。」(大正蔵三九、五七九中)と説かれたことに依るのである。

(5) ここでは、新義派を代表させて頼瑜(一二二六―一三〇四)の『大日経疏指心鈔』巻二から、「然古徳未_レ知_二自性身中有_二加持身_一。或云本地自証之説_二而害_二経疏自証無言之文_一。或云_二他受变化之説_一而同_二頭教三乘一乘之仏_一。恐隱_二疏家之深旨_一失_二宗家之本意_一。当_レ知_二以_二中台尊_一故不_レ壞_二大師自性身説法之義_一。又以_二加持身_一故不_レ違_二疏家神力加持三昧之説_一。疏中云_二本地法身_一者先拳_二能現本地身_一為_二今教主所依_一。」(大正蔵五九、五九四下)という説を取り上げる。

(6) 『大正蔵』七七、七七三中。そして、杲宝の師、頼宝の『真言本母集』巻第二の「両部大経教主加持分別事」という章

で、「又大日經教主成就句名本地身。此經中有相無相等一切法門。皆是本地身所説也。神變加持内証外用一切事業。又本地身所作也。」(『統真言宗全書』第二十卷、三四下—三三上)と説かれていたことから、本地身説を取る学派と言える。

(7) 『大正蔵』七七、七八四中、

(8) 『同書』後篇「真言密教の日本的展開、第一章、中世東寺教学の展開、1、東寺三宝の教学と展開(二八五—三四〇頁)を参照。他に、梅尾祥雲氏の『日本密教学道史』(高野山大学出版部、昭和十七年)の中の、「第三、中世学道史(上)―第四、中世学道史(下)」(九五—三一八頁)が、中世真言宗の教学史を考へる上で、大變に、有益な書であると言へる。

(9) 原文は、「經云。薄伽梵如来加持者。薄伽梵即毘盧遮那本地法身。次云如来。是仏加持身。其所住処。多仏受用身。即以此身。為仏加持住処。如来心王。諸仏住而其中。即從遍一切處加持力生。即与無相法身。無二無別。而以自在神力。令一切衆生。見身密之色。聞語密之声。悟意密之法。隨其根性(分)種種不同。即此所住名加持處也。」と説かれていた。

(10) 空海の『御遺告』の原文は、「若存灌頂流者自我身始。秘密真言此時而立。夫師資相伝嫡嫡繼來者。大祖大毘盧遮那仏授金剛薩埵垂菩薩。金剛薩埵垂菩薩伝于竜猛菩薩。竜猛菩薩下至大唐玄宗肅宗代宗三朝灌頂国師特進試鴻臚卿大興善寺三蔵沙門大広智不空阿闍梨六葉焉。惠果則其上足法化也。凡勸付法。至于吾身相伝八代也。」(大正蔵七七、四〇九中)と説く。